

宮沢賢治作

銀河鉄道の夜

朗読

長谷川葉月

鵜月光子

第6巻 1. 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」



宮沢賢治（みやざわ けんじ）

宮沢賢治の履歴については「雪渡り」の項参照。

「銀河鉄道の夜」は賢治の代表作の一つで、演劇、映画、ミュージカルとして数多く取り上げられ、今でも上演、上映されている人気作品。生前未発表だが、成立は1924年（大正13）頃と言われている。

物語は、「少年ジョバンニがケンタウル祭の日、理科の授業で銀河の勉強を終え帰る途中、丘の上で寝てしまう。気がつくと銀河に沿って走る幻想の汽車の中で親友のカムパネルラと会う。共に旅し光彩に満ちた情景を体験するが、ついに友を見失って夢から覚め、丘を下りると、友が級友を救おうとして水死したことを知る」というもの。時間と空間を超えて銀河の世界を旅する「四次元的宇宙観」が展開される。「群読」で二人の少年の真情を表現する。

「用語解説」

第四次（元）

次元が四つあること。空間の三次元に時間の一次元を加えたもの

「ではみなさんは、そういうふう^いに川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊^{つる}した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指^さしながら、みんなに問^とをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちができるのでした。

ところが先生は早くもそれを見附^{みつ}けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのですでしょう。」

ジョバンニは勢^{いきおい}よく立ちあがりましたが、立って見るともうはつきりとそれを答え

ることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすつとわらいました。ジョバンニはもうどきまぎしてまつ赤になってしまいました。先生がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指ししました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上ったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネルラを見ていましたが、急いで「ではよし。」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

ジョバンニはまつ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかに

は涙なみだがいつぱいになりました。そうだ僕ぼくは知っていたのだ、勿論カムパネルラも知

っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにあつたのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、

すぐお父さんの書しよさい斎おおから巨おおきな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まつ

黒な頁ページいっぱいに白い点々のある美しい写真を一人でいつまでも見たのでした。それを

カムパネルラが忘れる筈はずもなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼく

が、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒

がってわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた云いました。

「ですからもしもこの天あまの川がわがほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂じやりや砂利つぶの粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるならもつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油しゆの球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮うかんでいるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲すんでいるわけです。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見えましたがって白くぼんやり見えるの

です。この模型をごらんください。」先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸^{とつ}レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立ってこのレンズの中を見まわすとしてごらんください。こっちの方はレンズが薄^{うす}いのでわずかの光る粒^{すなわ}即ち星しか見えないのでしよう。こっちやこっちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらんください。ではここまでです。本やノートをおしま

いなさい。」

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星おおぐまぼしの下に、ぼんやりふだんよりも低く連って見えました。

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんどのぼって行きました。まっくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしだされてあったのです。

そのまっ黒な、松や檜ならの林を越こえると、俄にわかにがらんと空がひらけて、天あまの川がわがしらわらたと南から北へ亘わたっているのが見え、また頂いただきの、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねそうか野ぎくかの花が、そこらいちめんゆめに、夢ゆめの中からも薫かおりだし

たというように咲き、鳥が一疋^{ひき}、丘の上を鳴き続けながら通って行きました。

ジヨバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どこかするからだを、つめたい草に投げました。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果^{りんご}を剥^むいたり、わらったり、いろいろな風に行っていると考えますと、ジヨバンニは、もう何とも云えなくなつて、また眼をそらに挙げました。

あああの白いそらの帯がみんな星だというぞ。

ところがいくら見ても、そのそらはひる先生の云つたような、がらんとした冷いとこだとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧

場やらある野原のように考えられて仕方なかつたのです。そしてジヨバンニは青い琴^{こと}の星が、三つにも四つにもなつて、ちらちら瞬^{またた}き、脚が何べんも出たり引^こつ込んだりして、

とうとう きのこ 蕈 のように長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまちまでがやつぱりぼんやりしたたくさんさんの星の集りか一つの大きなけむりかのように見えるように思いました。

そしてジョバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく ほたる 蛍 のように、ぺかぺか消えたりともったりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、こ 濃い こうせい 鋼 青のそらの野原にたちました。いま新らしく や 灼いたばかりの青い はがね 鋼 の板のような、そらの野原に、まっすぐにすきつと立ったのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云う い 声がしたと思うといきなり眼の前が、ぱつと明るくなって、まるで億万の ほたるいか 蛍鳥賊の火を一ぺんに化石させて、そら中に沈めた しず という ぐあい 工合、またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくないために、わぎと と 穫れないふりをして、かくして置いた こんこうせき 金剛石を、だれ 誰かがいきな

りひっくりかえして、ばら撒いたという風に、眼の前がさあつと明るくなって、ジョバンニは、思わず何べんも眼を擦こすってしまいました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのです。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のなんだ車室に、窓から外を見ながら座すわっていたのです。車室の中は、青い

びろうどびろうど天蚕絨を張った腰掛けが、まるでがら明きで、向うの鼠ねずみいろのワニスを塗った壁かべには、真しんちゆう鍬しんちゆうの大きなぼたんが二つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気が付きました。それはカムパネルラだったのです。

ジョバンニが、カムパネルラ、きみは前からここに居たのと云おうと思ったとき、カムパネルラが

「みんなはねずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。」

カムパネルラは、なぜかそう云いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいというふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというような、おかしな気持ちが出来てしまっていました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直って、いきおい勢よく云いました。

「ああしまった。ぼく、すいとろ水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。

もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛んでいったって、ぼくはきつと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のようになった地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まったくその中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。そしてそ

の地図の立派なことは、夜のようにまっ黒な盤ばんの上に、一つ一つの停車場や三角標さんかくひょう、泉水や森が、青や橙だいだいや緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。ジヨバンニはなんだかその地図をどこかで見たようにおもいました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

ジヨバンニが云いました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの。」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通ったろうか。いまぼくたちの居るところ、ここだろう。」

ジヨバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指さしました。

「そうだ。おや、あの河原かわらは月夜だろうか。」

そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

「おかあさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。　ぼくはおかあさんが、ほんとうにさいわい 幸さいわい になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おかあさんのいちばんの幸なんだろう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえているようでした。

「きみのおかあさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」ジョバンニはびっくりしてさけ 叫さけびました。

「ぼくわからない。けれども、だれ 誰だれ だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸運だねえ。だから、おかあさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」カムパネルラは、なにかほんとうに決心しているように見えました。

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、十一時かつきりには着くんだよ。」

「ぼくたちも降りて見ようか。」ジヨバンニが云いました。

「降りよう。」

二人は一度にはねあがつてドアを飛び出して改札口へかけて行きました。ところが改札口には、明るい紫むらさきがかつた電燈が、一つ点ついているばかり、誰も居だれませんでした。

そして間もなく、汽車から見たきれいな河原に來ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、てのひら掌てのひらにひろげ、指できしきしきさせながら、ゆめ夢ゆめのように云っているのです。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そうだ。」どこでぼくは、そんなこと習ったろうと思いつながら、ジヨバンニもぼんやり答えていました。

河原の礫こいしは、みんなすきとおって、たしかに水晶や黄玉トパーズや、稜かどから霧きりのような青白い光を出す鋼玉やらでした。ジヨバンニは、走ってその渚なぎさに行つて、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀河の水は、水素よりもつとすきとおっていたのです。

それでもたしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮ういたように見え、その手首

にぶつつかつてできた波は、うつくしい燐りんこう光をあげて、ちらちらと燃えるように見えたのでもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいっぱいがけに生えている崖の下に、白い岩が、まるで運動

場のように平らに川に沿って出ているのでした。そこに小さな五六人の人かげが、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立ったり屈んだり、時々なにかの道具が、ピカツと光ったりしました。

「行ってみよう。きっと何か掘ってるから。」

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、鶴嘴をふりあげたり、スコップをつかったりしている、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

「そのその突起を壊さないように。スコップを使ったまえ、スコップを。おっと、もう少し遠くから掘って。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れ

て潰つぶれたという風になって、半分以上掘り出されてきました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄ひづめの二つある足跡あしあとのついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね。」その学者らしい人が、眼鏡めがねをきらつとさせて、こつちを見て話しかけました。

「くるみが沢山あつたろう。それはまあ、ざつと百二十万年ぐらい前のくるみだよ。ごく新らしい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているところに、そつくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。

このけものかね、これはボスといってね、おいおい、そこつるはしはよしたまえ。ていねいに鑿のみでやってくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で、昔むかしはたくさん居たや。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要^いるんだ。おいおい。そこもスコップではいけない。そのすぐ下に
ろっこつ
肋骨が埋もれてる筈^{はず}じゃないか。」学者はあわてて走って行きました。

「もう時間だよ。行こう。」カムパネルラが地図と腕時計^{うでどけい}とをくらべながら云いました。

そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなって、間もなく
もとの車室の席に座^{すわ}って、いま行って来た方を、窓から見えていました。

「切符を拝見いたします。」 赤い帽子^{ぼうし}をかぶったせいの高い車掌^{しやしやう}が、いつかまっす
ぐに立っていて云いました。

「さあ、」ジヨバンニは困って、もじもじしていましたら、カムパネルラは、わけもないと
ねずみ
いう風で、小さな鼠^{ねずみ}いろの切符を出しました。ジヨバンニは、すっかりあわててしまっ

て、もしか上着のポケットにでも、入っていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きなたた畳んだ紙きれにあたりました。こんなもの入っていたらうかと思つて、急いで出してみましたら、それは四つに折つたはがきぐらいの大きさの緑いろの紙でした。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか。」車掌がたずねました。

「何だかわかりません。」ジヨバンニはそつちを見あげてくつくつ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字サウザンクロスへ着きますのは、次の第三時ころになります。」車

掌は紙をジヨバンニに渡して向うへ行きました。

すると隣の乗客が横からちらつとそれを見てあわてたように云いました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。

天上どこじゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、なる

ほど、こんな不完全な幻想げんそう第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈はずでさあ、あなた方大したもんですね。」

川の向う岸が俄にわかに赤くなりました。楊やなぎの木や何かもまっ黒にすかし出され見えな
い天の川の波もときどきちらちら針のように赤く光りました。まったく向う岸の野原に大
きなまっ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗ききょういろのつめたそうな天をも焦こがし
そうでした。ルビーよりも赤くすきとおりにチウムよりもうつくしく酔よったようになって
その火は燃えているのでした。

「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだらう。」ジヨバンニが
云いいました。

「^{さそり} 蝎の火だな。」カムパネルラが又^{また}地図と首っ引きして答えました。

「蝎の火ってなんだい。」前の駅から乗り合わせた女の子に、ジヨバンニが聞きました。

「蝎がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聞いたわ。」

「蝎って、虫だろう。」

「ええ、蝎は虫よ。だけどいい虫だわ。」

「蝎いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあつてそれで^さ螫されると死ぬって先生が云ったよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん^こ斯う云ったのよ。むかしのバルドラの野原に一匹の蝎がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですって。するとある日いたちに見^み附かつて食べられそうになったんですって。さそりは一生けん命^に遁げて遁げたけどと

うとういたちに押おさえられそうになったわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまったわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺おぼれはじめたのよ。そのときさそりは斯う云つてお祈いのりしたというの、

ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになつてしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉くれてやらなかつたろう。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにもなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸さいわいのために私のからだをおつかい下さい。つて云つたというの。そしたらいつか蝸はじぶんのからだがまつ赤なうつくしい火になつて燃えてよるのやみを照らしているのを見たつて。いまでも燃えてるつてお父さんおっしや 仰おつしや ったわ。ほんとうにあの火それ

だわ。」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちょうどさそりの形にらんでいるよ。」

「もうじきサウザンクロスです。おりる支度したくをして下さい。」

汽車の中はもう半分以上も空いてしまい俄にわかにがらんとしてさびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。

そして見てみるとみんなはつつましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたってひとりの神こつこつ々しい白いきもの人が手をのばしてこっちへ来るのを二人は見ました。

ジョバンニはああと深く息しました。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの さいわい 幸 のためならば僕のからだなんか百ペン灼やいてもかまわない。」

「うん。僕だってそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな なみだ 涙 がうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジヨバンニが云いました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いました。

「僕たちすっかりやろうねえ。」

「あ、あすこ石炭 ぶくろ 袋 だよ。その孔 あな だよ。」カムパネルラが少しそっちを避 さ けるように

しながら天の川のひととを指さしました。ジヨバンニはそっちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまっくらな孔がどほんとあいているのです。その底がどれほど深いかその奥 おく に何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見え

ずただ眼がしんしんと痛むのでした。ジョバンニが云いました。

「僕もうあんな大きな暗やみの中だつてこわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集つてるねえ。

あすこがほんとうの天上なんだ。あつあすこにいるのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄にわかに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫さけびました。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」ジョバンニが斯こう云いながらふりかえつて見ましたらそのいままでカムパネルラの座すわつていた席にもうカムパネルラの形は見えずただ黒いびろうどばかりひかっています。ジョバンニはまるで鉄砲丸てっぽうだまのように立ちあがりました。そして誰だれにも聞えないように窓の外へからだを乗り出して力いっばいはげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉のどいっばい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにま

つくらになったように思いました。

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘おかの草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何だかおかしく熱ほてり頬ほほにはつめたい涙がながれていました。

ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさっきの通りに下でたくさん
の灯を綴つづってはいましたがその光はなんだかさつきよりは熱したという風でした。そし
てたったいま夢ゆめであるいた天の川もやっぱりさっきの通りに白くぼんやりかかりまっ黒
な南の地平線の上では殊ことにけむったようになってその右には蠍さそり座の赤い星がうつくし
くきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変わってもいないようでした。

ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいずつ集って橋の方を
見ながら何かひそひそ談はなしているのです。

「何かあったんですか。」と叫ぶようにききました。

「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云いますとその人たちは一斉いっせいにジヨバンニの方を見ました。

ジヨバンニは橋の袂たもとから飛ぶように下の広い河原へおりました。

河原のいちばん下流の方へ州すのようになって出たところに人の集りがくつきりまつ黒に立っていました。誰かがジヨバンニに走り寄ってきて、

「カムパネルラが川へはいったよ。」

「どうして、いつ。」と、ジヨバンニが聞きました。

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押おしてやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれども

あとカムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附みつからないんだ。」

ジヨバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい尖とがったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまっすぐに立って右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

下流の方は川はば一ぱい銀河が巨おおきく写ってるで水のないそのままのそらのように見えました。

ジヨバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかいないというような気がしてしかたなかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ。」と云いながらカムパネルラが出て来るか或いはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというよ
うな気がして仕方ないらしいのでした。けれども俄にわかにカムパネルラのお父さんがきつ
ぱり云いました。

「もう駄目だめです。落ちてから四十五分たちましたから。」

ジョバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムパネルラの方を知
っていますぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたのですと云おうとしましたがもう
のどがつまって何とも云えませんでした。すると博士はジョバンニが挨拶あいさつに来たとても
思ったものですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていましたが

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとう。」と叮ていねいに云いました。
ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握ったまままたききました。

「いいえ。」ジヨバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日大へん元気な使りがあつたんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジヨバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっぱいうつつの方へじつと眼を送りました。ジヨバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんにお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りました。